HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	苫小牧研究林におけるエコツーリズムのとりくみ ー中間報告ー
Author(s)	髙橋, 廣行
Citation	北方森林保全技術, 42, 25-26
Issue Date	2024
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93952
Type	departmental bulletin paper
File Information	2023_42 (5).pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方森林保全技術　42：25-26

Ⅰ－５　苫小牧研究林におけるエコツーリズムのとりくみ

－中間報告－

髙橋 廣行

森林圏統括管理部

1, はじめに

苫小牧研究林は苫小牧市の街に隣接する都市近郊林である。森林の一部を市民の憩いの場として開放し、野鳥観察や散策で一年を通じて多くの方が訪れている。小学校の遠足や総合的な学習の時間でも遊びや学ぶ場としても利用され、木育学習やアイヌ文化継承の場としての利用もある。苫小牧研究林を利用される大半の方は車両を利用するが、苫小牧市は JR の特急の発着があり、フェリーでは本州の太平洋側及び日本海側との連絡がある。新千歳空港からも 1 時間弱と立地環境にとても恵まれている。

年間多くの一般利用があり立地環境も良いので、苫小牧研究林を活用したエコツーリズムを開催することを検討し、2022 年度にワーキングを立ち上げた。構成員は苫小牧研究林に所属する教員と技術職員で、1 カ月から 3 カ月ごとに話し合いを重ねた。予算減による赤字対策であるとともに苫小牧研究林の認知度向上や北海道大学から要望されているリカレント教育にも応用することも視野に入れて検討した。

2, エコツーリズム WG の立ち上げと体制強化

エコツーリズムを開催するうえで苫小牧研究林の魅力になりうるキーを検討し、日程や対象者，参加費などの詳細も併せて検討を進めた。森，川，野生動物など多くの物が魅力になると考え、それらを組み合わせ 4 メニューを企画しそれぞれ各担当を決め内容について更に検討を進めた。

・夜の森の生き物：倉田正観，髙橋廣行
・川のはじまり：高橋太郎，髙橋廣行
・苫小牧研究林の歴史：植竹淳，奥田篤志
・昆虫を通じて自然環境とのつながり：中村誠宏，荒木小梅

自然と人とのかかわりや大学ならではの内容を取り入れ検討し内容を求めたが、苫小牧研究林の職員にはエコツーリズムの立ち上げ経験者が居ないため、有識者にアドバイスいただくため、2023 年 11 月に野外教育プログラムやエコツーリズムなどに詳しい方々や苫小牧市職員を招き検討を進めていたエコツーリズムについてのプレゼンを実施した。

そこで課題がいくつかあげられた。参加者の目線になり楽しむ事が出来るのか、集客が研究林で実施できるのかなどの問題点が明確になった。また、大学では体験より説明が多くなりがちなため、体験をより多く目指し、何のためにその体験を実施するか丁寧な説明も必要であるというアドバイスもいただいた。そこで、メニューの内容をより濃くするために 4 メニューから 2 メニューにまとめ、かつ参加者目線でも楽しんで学ぶことができるよう食も取り入れながら更に検討を進めた。

検討を重ねていくうえでなかなか打開策が見つからないのが集客で、苫小牧研究林でも不得意な分野であるため北海道運輸局室蘭運輸支局と連携し、アドバイスいただきながら進めることとした。室蘭運輸支局は関東や東北圏の私立中高生を対象に胆振地区で学習ツアーを計画し

ており、そのツアーの一つの学習場所として苫小牧研究林がキーになると考えていただき野鼠調査（写真 1）や魚類調査を見学されていた。母体の北海道運輸局はエコツーリズムの許認可を実施しており、集客やエコツーリズムのノウハウも教えていただくため連携して進めることとした。更に北海道大学側の協力体制強化として広報・社会連携本部の力も借りることとし、より多くのアドバイスをいただきながら検討を進めることとなった。

室蘭運輸支局が進められていた胆振地区学習ツアーは、苫小牧市と周辺の自治体含めより魅力的な学習ツアーにすることに変更し、苫小牧市観光協会が窓口となり官公庁や観光振興機構の補助金を申請しながら環境整備も併せて進めていくこととした。

2024 年度は補助金申請や体験版学習ツアーを計画しているが、苫小牧市周辺の自治体とも連携して進めることとなる。エコツーリズム関係でより多くの時間を割くことになるが、着々と進めていくことを想定している。

写真 1, 野鼠調査の説明

3, おわりに

今回のエコツーリズムでも多くのことを学んだ。外部の意見を取り入れることで、新たな発見が生まれ、様々な視点に立つ必要はある事を学んだ。また、参加者が環境教育初心者の場合は多くの体験を通して自然を知ってもらい、知識がある方には体験する意味を丁寧に説明することも必要で、なぜその体験や考えが必要なのか参加者に考えていただく時間を持つことや参加者の今後の生活に結びつけることで、参加者にとっても意味のあるエコツーリズムにできることを学んだ。

ほかアドバイスをいただいた方々から確認されていたのが、本気で人を集めたいと思っているかである。エコツーリズムの立ち上げは多くの労力が必要で、苫小牧研究林でそれが可能か確認されていたと考えている。研究林は様々な業務を抱え多くの労力を掛けることは難しく時間を割くことが出来ずにいるが、苫小牧研究林でエコツーリズムを開催し、それを参考にセンターもしくは大学でエコツーリズムを開催する場合、他の組織の労力はかなり低減できると推測している。今後改良や実施を重ねデータを蓄積しそれを参考にしていただくことが立地環境の良い苫小牧研究林の役目でもあると考えている。